

第13回会議で出された主な意見

【北九州市の目指す教育の姿について】

(子どもの未来をひらく教育改革会議報告書(素案)に対する意見)

第1章 検討の視点と背景

3ページ目の議論の進め方概念図の中で学校、地域、家庭が書いてあるが、会議を続けてきた中での意見としては、家庭が一番上にしたほうがいいのではないか。一番上から、家庭、地域、学校がいいのではないかと思う。

確かな学力と体力ということでは、基礎学力プラスアルファというものもあると思う。子どもたちが夢を持てるかとか、考える力、実行する力、自分の言葉で自分の意見を言うとか、ディベートをする力、批判する力など、いろいろなプラスアルファの部分があると思うので、その辺の部分の確かな学力でぐくりにしないで、具体的に書き込めば、それがまた北九州の教育を特徴するものになるのではないかと思います。

第2章 子どもの未来をひらく教育の理念

1. 目指す子ども像(北九州っ子)

目指す子ども像「北九州っ子」の「自立」と「共生」の考え方については異論はないが、少し付け加えて、「共生」の部分で「思いやりの心がある子ども」となっているのを、「思いやりの心を持ち、思いやりのある行動が取れる子ども」という、心だけではなくて行動も伴うというところを書いたほうがより良くなるのではないかと思います。

「自立」の中身について、「子どもが教育を受けている間に自分がやりたいことを見つけ、目標を持ち実現していく過程で身に付ける力」と定義しているが、ここの部分をもっと前面に出したほうがいいのではないかと。

「自立」と「共生」という理念については賛成であり、これは踏襲すべきだと思う。しかし、ただ踏襲するのではなく、この理念についてもっと具体的に書くべきである。教育の北九州方式検討会議の理念、プロセス、それと子どもの未来をひらく教育改革会議との関連についてである。この関連については別に項を起すべきではないかと。

「自立」と「共生」という理念は、大人の側が子どもに望むというような印象を受ける。子どもの側からすれば、せっかく生まれてきたのだから、自分がやりたいことをやりたい、あるいは自分の力を最大限に生かしたいというところがあるのではないかと。そのような内容を何か盛り込んだほうがいいのではないかと。

6ページの目指す子ども像の中で「自分の力でやり遂げ、自立する力を持つ子どもという人」(大人として)でも分かると思う。もう一つ、「思いやりの心がある人」でも、文章はできるが、思いやりというのは、私の会社の標語では、相手の立場に立ってものを考えることができることである。

思いやりの心を持つ子どもをつくるということについては、それをどう植え付けていくかという方法論も書く必要があるのではないかと。

やはり6ページの概念図のところでは、何となく、上から子どもに押し付けているような書き方ではないかという気がする。書き方としては、子どもの側にも立って考えてみたほうが良いと思う。

子どもに思いやりがあれという前に、まず大人がやるのだと言うべきではないか。まず大人がやるのだから、みんなもしてほしいと言うなど、角度を変えて考えてみてはどうかと思う。

この会議は、子ども向けに解説しているのではないと思う。やはりこれから私どもが、このように指導していくことがよいのではないかという考えで私は意見を出している。子ども向けに解説するのであれば、観点が少し異なる。

6ページの概念図は、確かに大人向けなのだろうと理解しているが、子どもが見たときにどう感じるのかというのも無視できないだろうと思う。自分の力でやり遂げ、自立する力を持つ子ども、こういう子どもを目指すのだというのも、上から目線という感じもするので、自立する力を持ってもらいたい、思いやりの心を持ってほしいなど、大人からの希望形のような形の文言にしてはどうか。

私は、子どもも迷っているような感じを受けている。やはりしっかりした大人がしっかりした方向性というものを見つけてあげるために、会議で意見を言っていると思うので、あまり遠慮すると分かりにくくなるのではないか。子どもというのは分からないことがいっぱいあるので、それを指導していくのが親の役割であり、大人の役割ではないか。

学校も、学校経営方針の中で、本年度はこういう目指す子ども像で取り組んでいきましょうなどと明らかにしていく。また、目指す教師像というものもある。一つの目指すものを出して、教職員が具体的な教育活動の場で日々の教育活動を展開し、併せて保護者や地域にも示す。学校だけで目指す子ども像に行きつくわけではないので、家庭や地域の協力も得ながら、やっていきたいと思いますというわけである。

そう考えると、この概念図も一つの理念の中で出されているので、こういう子どもたちを、家庭、学校、地域で目指していきましょうということになると思う。だから、具体策はこの後の章で出てくるわけなので、これでいいという感じがする。

6ページの概念図は、子ども、親、家庭、学校の先生が一緒に見られるものを、もっとシンプルにつくるほうが良い。あくまでもプレイヤーは子どもであるので、大きくなってどんな大人になるのかということを知って教えてやる、はっきり、目標を明確にしてあげられるという意味であれば、「自立」と「共生」の部分を大きく打ち出して、それに対して大人はこういうことをしますということがあれば良いと思う。

「自立」と「共生」という2つの理念は、一くりにしたほうがよいのではないか。自分の力でやり遂げ、自立する子どもを育成しながら、相手の立場に立ってものが考えられる、その思いやりの子どもを育てていこうと。そして、その横にきちんと「自立」と「共生」という形にする。変に四角で囲まないほうが良いのではないかと思う。

図の位置については、家庭を真ん中に持ってきて、両サイドの地域と学校から双方向の矢印を持ってくる。そして、学校と地域を結んだ線も双方向にする。そうすれば学校と地域が連携しながら、それぞれの立場でお互い家庭に支援していくこととなる。

6ページの図は概念図として書かれている割には、何となく方法論的な図に見える。家庭、学校、地域の3つが絡み合っ、それぞれの役割分担をする中で、矢印の先の目指す子ども像をつくっていくという、方法論的な簡略図にしか見えない。概念というのは、こういう子どもたちをつくる時には、こういう全体の絡みがあるという、まとめた視点で見られるような図にしたほうが良いと思う。

6ページの図では、「自立」と「共生」があたかも分かれているような気がするが、「共生」の中でしか「自立」はあり得ないと思う。文章中に補足説明はあるが、例えば、「やり遂げられなかったら自立がない、それはあなたの自己責任だ」と考えているととられかねない。もし図が必要ならば、そういうイメージが分かるようなものにしたほうがよいと思う。

やはり「自立」、「共生」の前に、子どもの夢を育み、その可能性を最大限に引き出してほしいというのは、親として一番の希望だと思う。子どもたちもそう思うのではないか。その上で、「自立」や「共生」ということも、ちゃんとわきまえてほしいということになるのではないかと思う。

「子どもを育てる10か条」の最後にも「子どもと夢を語り合おう」と書いているので、このような表現は概念図にも入れたほうが良いと思う。

2. 家庭、学校、地域への期待と連携のあり方

(1) 家庭への期待

生まれた子どもたちは、みんな自分で育つ力がプログラムされており、それが個性や自分で生きる力などになっていくと思う。そのプログラムされた力が発揮されるためには、生まれた時から周辺から愛され、人間っていいなと信じる心が生まれて安定したときに、はじめて周辺のものに対する好奇心や、不思議だなと思う気持ちが生まれる。そこはもう教育の芽生えだと思っている。

大人たちから愛されて、自分は必要な存在なのだという自己確信力、そのことがすべての基本になるのではないかと思う。教育の出発点はそこかなと思うが、そこが描ききれていないような気がする。

親の立場からこの文言を見ると少しきついと思う。しつけは家庭がしなければいけない、法律も変わったからそれはきちんと認識しなさいという話になりそうな文言である。家庭が教育の出発点というのは、愛情を持って育てるという前提から教育が始まるなどの文言を書かれたほうがやはりいいと思う。それをクリアできない諸々の状況に関して、ではそのサポートとしてどうあるべきかという書き方、思いが伝わって頑張ろうという気持ちになるような文章というのが少し必要なのかと思う。

7ページの家庭の役割で、「しかし、一部には、子どもの教育やしつけを学校まかせとし」とあるが、これは現状の記述である。役割の部分に記述を入れる必要があるのかどうかという点と、なるべくマイナス言葉は使わないほうがよいという点から、文言としては出さないほうがよいと思う。

(2) 学校への期待

学校への期待のところは、柱立てにしてコンパクトに書かれており、ある程度意味は分かる。しかし、4つ目の「学習の結果を評価、検証し、対策を講じる」という部分が、具体的にどういうことを考えているのか分からない。

やはり「自立」、「共生」の前に、子どもの夢を育み、その可能性を最大限に引き出してほしいと考えており、それであれば、学校の役割の中で、印の3番目に「子どもの発達段階に応じた～」とあるが、やはりここで子どもの適性なり可能性を最大限に引き出すというような説明が必要であると思う。

学校の役割として書かれていることは、ごもっともなことだと思う。しかし、はっきり言えば、これができていないから苦しいのだとも言いたい。

家庭にも言えることだが、教師が見たときに、それをサポートすることとしてどうあるべきかという書き方、思いが伝わって頑張ろうという気持ちになるような文章というのが少し必要なのかと思った。

学校の役割の中では、一部が箇条書きで書いてあり、家庭、地域の役割の中ではこの書き方をしていないというのは、少し違和感を感じる。

学校の役割の中身を校長の立場で見ると、今できているかいないかではなく、やはりこういうことを目指して取り組んでいく、そのために学校としてどういった具体策で臨むのか、あるいは行政としてどんな支援策で臨むのかということにあると思う。

決して今は、現状では十分ではないのだろうが、こういうことを目指した学校教育でないとはやはりいけないという意味で、これでいいのかと思う。

学校の役割の中で、「学習の結果を評価、検証し、対策を講じる」とあるが、あまりにも文言が幅広く、この表記の仕方では少し分かりにくいと思う。学校での個別の指導や声かけなども1つの対策だし、教え方を工夫することも1つの対策だと思う。

また、委員会等が行っている観点別到達評価なども学校の状況、子どもの全体的な状況が出る。何が足りないのか、どういう策を打たなくてはいけないのか、これもこの文言に当てはまるだろうと思うので、この標記は考え直した方がよいと思う。

学校への期待の中で、「保護者からの利己的で理不尽な要求」と書いている。これは、いわゆるモンスターペアレントのことを言われていると思う。確かにそういう側面もあるとは思いますが、いろいろな背景があって起きていることだと思う。すごく一方的な書き方のような気がするので、少し配慮したほうがいいのではないかなと思う。

親の理不尽な要求は実際にとんでもないものが出てきており、最近増えてきている。だから、表現はやわらかくてもいいが、やはり理不尽な要求という表現はあっていいのではないかと思う。本当に考えられない要求がある。

(3) 地域への期待

P T A活動も企業の理解なしにはできにくいと思う。

また、少子化対策委員会で就学前の子どもを持つ親は超過勤務をさせないという案が出たが、企業の反対で実現は困難だろうという新聞記事を見た。北九州の子どもを育てるときに、企業が、その利潤を一人ひとりの市民によって与えられたものと考え、社会貢献をもう少し積極的に子育ての面からもしてくれることを望んでいる。企業が地域の中に含まれているとしても、あまりその姿が見えない気がする。

(4) 行政への期待

家庭、学校、地域への期待、役割、また、条件整備については、行政がバックアップしてくれないとできない。家庭、学校、地域の役割がより推進できるための条件整備については、行政はそれを鋭意努力するとか、何か強い言葉で言ってくれればと思う。例えば学校では、予算が伴うであろうと思われるが、財政が非常に厳しい中で、ない予算の中で最大限の努力をせよと言われたら致し方ないが、やはりその文言がほしいという気がする。

(運営している) 学童保育では、子どもの学力の低下が進んでいる。素敵な放課後を過ごさせようと努力しているが、塾に行ける子どもと学童に夕方まで置かれる子どもの学力はとても開いてくると思う。

社会情勢が変わり、「従前であれば家庭が担っていたことが学校に期待される」という現状が書いてあるが、学力日本一を目指すなら、やはり行政の努力として教員の配置等必要な条件整備をしてもらわないと現場はどうにもならないのではないかと思う。子どもたちの「夢の実現」ということに、やはりメインを置くべきだと思うが、その夢に向かって行政が支援する、また、そういう体制づくりをしていこうという言葉も、ぜひ付け加えてほしい。

行政の役割の記述があまりにもプアだと思う。これでは何をするのかというイメージがわからない。多分、具体策が出てこない、また今までどおり縦割りで進んでいくのではないかと非常に危惧する。やはり、条件整備等について、もう少し内容を詰めてもらいたい。

(5) 家庭、学校、地域の連携のあり方

家庭、学校、地域の連携のあり方も、内容があまりにもプアだと思う。これでは何をするのかというイメージがわからない。条件整備等について、もう少し内容を詰めてもらいたい。

第3章 子どもの未来をひらく教育～6つの視点ごとの方向性～

「1. 確かな学力と体力」に関する視点

以前、麻田副市長の講演で、安心して北九州市で子どもが育てられるようなまちづくり、そのためには企業が役割を果たしてほしいという話を聞いた。また、昨年10月のタウンミーティングでは小学校校長会会長の前川校長が企業も援助をしてほしいと言っていた。子育て支援という点では、ぜひ、ワーク・ライフ・バランスは進めてほしい。

具体的な文言としては、15ページの にワーク・ライフ・バランスという言葉があるが、一覧表になったときには目立たない。地域の中で企業の果たす役割は大事だと思うので位置づけを考えるべきである。

昨年10月のタウンミーティングで、小学校校長会会長の前川校長が「非常に学校は疲れている」と話されていた。そのなかで正規職員を拡大してほしいということと、それなりの役割分担をやってほしいという話があった。やはり現場の校長として一生懸命言われた中身は、何らかの形で入れてもらえれば、よりよい北九州の教育につながるのではないかと思う。

ほとんど勉強をしていない子どもが非常に多いというのが気になる。やはり、具体的な取組みの中で、学習の習慣付けというのは、どういう形でやるのか、学校でやるのか、など考えるところはあるが、必要なのではないかと思う。

効果的な食育指導において、「食育推進会議において具体的内容を議論」となっているが、食育推進会議との役割分担ということであれば、問題ないが、改革会議の報告書としてはどのような体裁になるのか。また、今、食育推進会議はどこまで進んでいるのかなど、分かるのであれば教えてほしい。

「2. 子どもの特性を伸ばす」に関する視点

「部活動の振興」、「専科教育」、「小中連携などの一貫的教育のあり方」となっているが、少し違う気がする。北九州市の基本構想、基本計画では、人を育てるという項目の中で、教育について、「子どもの可能性をひらく学校教育の充実」と掲げており、その施策の中に「子どもの特性を伸ばす教育の充実」というのを掲げている。

この教育改革会議の報告の中でも、もう少し、「せっかく生まれてきたからには」という部分を強調したほうがいいのではないかという気がする。

今、スポーツ障害が増えており、中学校で6.7%程度の運動器障害、スポーツ障害があるということが言われているので、学校保健会等としても運動器健診をすることを検討している。関連して18ページに部活動の強化とあるが、指導者の方に運動器障害を起こさせないような研修等、指導者の能力を上げるような研修の場がほしいと思う。

部活動の指導者というのは、教職員だけではないと思う。全体を含めて、そういった指導者の強化という場をどこかに入れてもらいたい。

「3. 学校の力をさらに高める」に関する視点

福岡県の教職員の休職者数が 360 名を超えていたと聞いた。非常にハードで精神的なものがあるということだと思うが、360 名が休職していたら、現場は大変だろうと思う。この教職員の復職を考える手は何かないのか。360 名も長期欠勤したら、普通、企業だとつぶれてしまう。人手が足りないというわりには、360 名が休んでいるが、何か解決策はないのか。

教職員の長期欠勤者は、6 割以上がうつ病と精神疾患である。早期復職をさせると、また再発をして悪化するということがあるので、対応は非常に厳しいと思う。

教職員の心の病気については、以前に比べて休まれる先生方が相対的に増えている。学校は病休代替講師という制度があるので、市の教育委員会を通して、県と協議し 2 週間ぐらい後に担当されるといような状況にある。しかし、担任に代わって即、病休代替講師がその学級に入れるかという、なかなか難しいところもある。

今は、企業と同様、学校もいろいろな取組みの中で非常に忙しく、子どもに向き合う時間すら以前に比べて厳しい状況にある。厳しい財政の中ではあるが、教職員の数を少しでも必要に応じて増やしていくという柔軟な施策がほしいと思っている。

教職員は、必要以上の書類作成というのをすごく要求されてきている。これは、医療の部分もそうだと思うが、本当にこんなもまで作らなければいけないのかというくらい、報告書などの作成が多い。それを北九州はもっと簡素化できないのかと思う。子どもたちと話す時間を増やすなどの対策も、やはり考えていくべきではないかと思うので、行政の役割とすれば、できるだけ報告書等の書類の簡素化を目指して行くべきではないか。

教育委員会では、本年度の年度途中からだが、「教職員の多忙感を解消するためのプロジェクトチーム」というものをつくっている。その中では、報告書等無くせるものはなくしていこうという取組みを、教育委員会主導で始めている。

「夏休みなどの長期休業日の弾力的な運用」については、趣旨としては、授業時数が足りない、もう少しきちんと学習の反復をやりたいということがあるかと思う。ただ、その前にすべきことは正規のカリキュラムと正規の時間数の中で、目的達成ができない原因は何なのかという視点で、日常の取組みを見直すのが第一なのではないかと思っている。

また、北九州の場合、1 週間、夏の教室を開いており、(学習が)遅れてきた子どもたちを中心に先生たちが面倒を見ている。その効果の検証は分からないが、少なくとも取組みはやっているのも、もし、この取組みの記述をそのまま残すのであれば、きちんと検証しておくべきである。現場の人間にすれば、不安感がよぎる思いがある。

「長期休業日の弾力的な運用」については、授業時数の確保の点だけでなく学校行事等の関係で、あえて 1～2 日など、早目に出校せざるを得ないときもあり得るので、取組みの記述として残してほしい。

「長期休業日の活用」ではなく、「活用などの検討」となっているので、その可能性を含めて考えるという理解でよいのではないか。

「4．学校や地域の教育活動を市民の力で支える」に関する視点 (再掲)

P T A活動も企業の理解なしにはできにくいと思う。

また、少子化対策委員会で就学前の子どもを持つ親は超過勤務をさせないという案が出たが、企業の反対で実現は困難だろうという新聞記事を見た。北九州の子どもを育てるときに、企業が、その利潤を一人ひとりの市民によって与えられたものと考え、社会貢献をもう少し積極的に子育ての面からもしてくれることを望んでいる。企業が地域の中に含まれているとしても、あまりその姿が見えない気がする。

「5．心の育ちの推進(青少年の健全育成を含む)」に関する視点

「ノーテレビデー・ノーゲームデー等の取組みの検討」については、取組方法にもよるが、基本的には大いに賛成である。また、やはり心の育ちの問題では、携帯電話については、基本的に子どもから距離を取るべきで、子どもにはできるだけ持たせないほうが良いと考えているので、今、学校に持ち込んだらどうなのかなどはわからないが、何かこの会議としての見解を入れたほうが良いと思う。

携帯電話については、中学生では結構持っているが、私の学校では、基本的には携帯という言葉は使わず、学校に不要な物は持って来ないという言い方をしている。例えば、漫画を持ってくるとは駄目、だから携帯も駄目という言い方である。

例外として親からの相談により預かる場合もあるが、その場合は、きちんと職員全員に周知し、きちんと担任が電源を切って預かり、放課後にそのまま返すことにしている。小学校も中学校と同じで、携帯等を学校に持ってくることはない。

ただ、家庭で携帯電話を持っており、友だち同士でメールをして、トラブルになったというようなことがあった。携帯電話については、家庭を巻き込んだ形で、携帯電話、メール、あるいは書き込み等々の指導を徹底しなくてはいけないし、「再考を促す取組み」というのをしっかりしないといけないだろうと思う。

「6．特別支援教育の充実」に関する視点

表現の問題だが、目指すべき方向性が全部体言止めとなっている。ほかの視点が全部動詞で終わっているので、表現は合わせるほうがよい。

「特別支援教育の環境整備」の「幼稚園、保育所における特別支援教育の充実」については、関係機関と連携した公立幼稚園における特別支援教育のあり方の検討とあるが、内容を充実させるのであれば、公立幼稚園だけでなく、保育所も私立(幼稚園)も全部検討に入るのではないかと思う。公立幼稚園と限定されるところに疑問を感じている。

特別支援教育については、私立幼稚園の状況は分からないが、保育所はきちんと対応できているので、保育課と協議してほしい。保育所の場合は、子ども総合センターで判定されれば、保育士の加配もあるし、研修体制も研修所と保育課と保育士会で、3本立てでやっている。

その他の視点

各視点において、目指すべき方向性が、家庭、学校、地域でそれぞれ書かれているが、文末を見ると、それぞれ主語が分かれているように感じる。例えば、視点1では、学校については、学校が主語と読めるが、家庭や地域では、主語が異なっているように感じる。それぞれを主語として書くのかどうかなど、整理するべきではないか。

各視点における目指すべき方向性で、家庭、学校、地域とあるが、ここに行政を入れてみてはどうか。例えば、視点1の中で、家庭の教育力向上を支援する取組みを進めるとあるが、この主語は行政でしかあり得ないのではないか。

各視点における目指すべき方向性については、すべて、「行政を主語」という形で整理していくほうが良いと思う。行政が、家庭教育が豊かになるように支援をしていく、あるいは、行政が、学校が取り組めるように、何らかの条件整備をしていくという形で、そろえたほうが良いと思う。

そういった観点からすると、行政という項目は特別つくらなくても、家庭、学校、地域に対して、あるいはそれぞれ全体に対して何をすべきかというようなことで、すべて行政に対しての意見等ということになるのではないかと思う。